

研究論文》

リンド・ウオードの「絵小説」	笹本 純	6
岡崎京子「リバーズ・エッジ」における「内面」の位相	杉本章吾	25
「正子ヤンの冒険」の変容過程 —— 初出作品の検討と単行本化の問題 ——	竹内オサム	42
少女マンガの源流としての高橋真琴	藤本由香里	64

研究ノート》

乱反射するテクスト——富樫義博「レベルE」論——	佐藤ちひろ	92
--------------------------	-------	----

報告》

張楽平「三毛流浪記」の改作について —— 三毛と大道芸人 ——	材木谷 敦	111
------------------------------------	-------	-----

●特集 ● 「はだしのゲン」をめぐる国内外の研究

「Reading Manga」の「政治性」 「ゲン」論特集の序文に替えて	ジャクリーヌ・ベルント	128
グローバル化の中で日本マンガを読む —— 書評 Jaqueline Berndt & Steffi Richter, eds, <i>Reading Manga: Local and Global Perceptions of Japanese Comics</i> , Leipzig: Universitätsverlag 2006	伊藤 公雄	135
「「はだしのゲン」がいた風景」書評 「ゲンのく目をめぐって」	小野 耕世	140
レビュー 「「はだしのゲン」がいた風景」	大城 房美	146
英米圏における「はだしのゲン」 平和運動のコミック、グラフィック・ノベル、そして日本マンガとして ロジャー・サビン [翻訳：山中千恵・本多彩]		150

編集後記

「マンガ研究」投稿規程	174
「マンガ研究」執筆要領	175
「マンガ研究」投稿原稿 審査要領	176
「マンガ研究」投稿原稿 審査要領	179
お知らせ	180

「正チャンの冒険」の変容過程

— 初出作品の検討と単行本化の問題 —

The Process of Transformation
in “Shochan No Boken”
About the Work in a Newspaper and Books

竹内オサム

Osamu TAKEUCHI

同志社大学社会学部 教授

要旨

「正チャンの冒険」(小星泰・東風人画)は、大正末期に「朝日新聞」に連載が始まった、フアンタジー性豊かな漫画である。洋服姿の少年がリスを従え活躍するヒーローもので、吹き出しを用いたスタイルも当時斬新な印象を与えた。本稿では、新聞連載時の初出作品を検討するとともに、単行本化の過程のありさまを検証した。その結果、「正チャンの冒険」は、一般的に受け取られているような異国フアンタジーの要素に加え、SF的な発想の物語も含むシリーズであることがわかった。またフアンタジーの設定に、「森」が重要な役割をもつことも判明した。一方表現のスタイルの面では、さまざまな試行錯誤のあとがうかがわれ、海外漫画の移入という過度的性格が見取れた。残念な描写が許容された点も含めて、新聞連載というメディアの性格が、さまざまな側面でのこの漫画のあり方を規定していたのである。

Summary

“Shochan no Boken” (original by Koboshi, picture by Tohuzin) is superior fantasy comics that serialization began in “Asahi Shimbun” at the end of the Taisho era. It is a hero story of the boy whom dressed in clothes and accompanied by a squirrel. “Shochan no Boken” style of the expression that used speech-balloons gave readers novel impression in those days. In this article, I examine the first work published serially in a newspaper. I put it together and examined a process before becoming a

book. As a result, “Shochan no Boken” was not only Fantasy but also a story of an idea of SF, it was understood. In addition, it was recognized that “Forest” had an important role for setting of fantasy. On the other hand, with an aspect of a style of expression, various trial and error was watched. I was able to grasp the transient character that was influenced by overseas comics. Character of the media of newspaper serialization decided a state of these comics at the various sides. The point that brutal description was permitted is included in that.

I. 234567891011 物語の概要と本稿の目的

「正チャンの冒険」は、大正末期に日本の新聞に連載された、フアンタジー性豊かな漫画(総物語)である。洋服姿に帽子をかぶった「正チャン」という少年が、リスをお供にしたがえ、冒険の旅にでかけるというストーリー展開をもつ。小星こと織田信恒が案を、東風人こと権島勝一が絵を担当した。吹き出しを用いた子ども向けの漫画が、昭和の初期に、新聞雑誌を中心に掲載されていく、その先駆けとして知られる。

「正チャンの冒険」は掲載誌紙をいくつか変えて連載が続いた。はじめ朝日新聞社の日刊紙「アサヒグラフ」に大正12(1923)年1月25日より連載が始まったが、関東大震災により中断、のち10月20日より『東京朝日新聞』に場を移して長期の連載となった(『大阪朝日新聞』には、遅れて同年11月4日より連載開始)。全国紙としての販路を目指した「朝日新聞」に載ったため、多くの子どもたちに愛読された。主人公が被った帽子が正チャン帽として流行。またコマの外に説明文を添えながら、同時にコマ内に吹き出しを用いて、当時の読者に斬新な印象を与えた。一般には、そうしたフアンタジー性、キャラクター設定、斬新な表現のスタイルが高く評価されてきた。¹⁾

本稿では、新聞連載時の初出作品を検討するとともに、単行本化の過程で、どのような描き変えが、また作品の取捨選択が行われたのかに焦点をあわせ、作者織田と権島の創作意識を明らかにしたい。とりわけ、作品の(フアンタジー性)〈表現のスタイル〉に留意して、案と絵を分担した二人がどういった意図のもとに連載をつけたのかを明確にし、漫画史のなかでの位置づけをはかりたい。

作品というものは、初出にあたってみると、その本来の顔が見えてくるのである。筆者はこれまでも、「スビー太郎」[漫画太郎]「ロス・ワールド」など、

戦前戦後の子ども漫画史を形づくった作品の初出を調べ、描き変えのあとを明らかにしてきた。²本論考も、同様の関心の上に立つ。

(以下では、便宜的にこの漫画の総称として「正チャヤンの冒険」、主人公の名を「正チャヤン」と記す。表現のスタイルでは総物語と近接するが、「漫画」と呼んでおく。また作品は時代性と密着した関係にあるため、本文では西暦ではなく便宜上、元号で表記することにす。図表、注記等においては、大正 = T、昭和 = S、平成 = Hと略記)

2. 1956-7891011 物語の概要と本稿の目的 作品の成立

以下では、作品の成立事情、初出作品の検討、単行本の成立過程の順にたどって、この作品の内実を論じていくが、最初に「正チャヤンの冒険」の成立事情について簡単にふれておきたい。

原作を担当した織田信恒は、はじめ日本銀行の銀行員であった。「五年間日本銀行に勤めるが、その間、欧米、中国、朝鮮を仕事を通じて視察」³、ヨーロッパで発行されているような子ども新聞を、日本でも発行したいという思いを胸にいたいて帰国。くしくも新しく創刊される『アサヒグラフ』が「子供ページ」を設けるというので、夢を実現するため朝日新聞社に嘱託として入社する。⁴当時朝日新聞社は子ども博覧会を企画したり、子ども雑誌『コトモアサヒ』(T12.12創刊 大阪朝日新聞社)を創刊したりしたから、「正チャヤンの冒険」も一連の児童文化事業の流れのなかから誕生した作品であったことができるだろう。

織田は、「子供の心の中に在る理想的のヒーローを一人活躍させて色々の難関を突破して行く其の英雄的行動と其の考へ方を永い物語として変化の中に語つて行きたいと思つた」⁵という。リスについては、「筆者がニユーヨークのハドソン河畔に下宿してゐたとき、リバーサイド公園で夕方多数のリスを友達にして遊んでゐた時以來利口な可愛い動物だと思つたので仲間になつて貰つた」⁶とのこと。

一方、絵を担当した権島勝一や朝日の記者であった鈴木文史朗にも、執筆当時のことを記録した文章がいくつもある⁷。こうした回想をつきあわせると執筆の事情が浮き彫りになるが、その詳細は一度別稿にまどめたことがあるので⁸、ここでは手本とした漫画の存在を指摘するにとどめたい。鈴木文史朗の回想によると、「当時ロンゴンのタフロード新聞『ミラー』」にのつているペンギン鳥を中心とした連続漫画」⁹をモデルにしたのだという。「正チャヤンの冒険」は、その出発点から海外の漫画の影響下にあったわけだ。

以降「正チャヤンの冒険」は、『アサヒグラフ』から『朝日新聞』に、また発表の場

を他に移して続いていく。そして当時美しいカラーの単行本にまとめられ評判となり、また戦後になつても描き変え版の本が2冊刊行された。とりわけ戦前のカラー版の本の刊行により、「正チャヤンの冒険」は永く人々の心に記憶されることになつていった。

3. 1956-7891011 連載作品の初出と単行本

「正チャヤンの冒険」は掲載紙をいくつも変えて続いた。混乱を避ける意味から、初出、および単行本の書誌を先に羅列して示しておくことにする。(『大阪朝日新聞』にも掲載されたが、『東京朝日新聞』の書誌を記す。)

<誌紙掲載>

「正チャヤンのぼうけん」 日刊『アサヒグラフ』 T12.01.25～T12.09.01

「お伽 正チャヤンの冒険」 『東京朝日新聞』 T12.10.20～T14.10.31

(T13.08.29～T13.10.04の期間は休載)¹⁰

「水曜日の正ちゃん」 週刊『アサヒグラフ』 T13.03.12～T13.08.27

「正チャヤンのその後」 『東京朝日新聞』 T15.02.12～T15.05.18

「ネズミの日記」 『東京朝日新聞』 S06.05.02～S06.10.29

(全17話のうち、5話のみに正チャヤンが登場)¹¹

<単行本>

「お伽 正チャヤンの冒険 七の巻」 朝日新聞社 T13.07.06

「お伽 正チャヤンの冒険 式の巻」 朝日新聞社 T13.09.10

「お伽 正チャヤンの冒険 参の巻」 朝日新聞社 T13.10.25

「お伽 正チャヤンの冒険 四の巻」 朝日新聞社 T14.01.10

「お伽 正チャヤンの冒険 五の巻」 朝日新聞社 T14.03.20

「お伽 正チャヤンの冒険 六の巻」 朝日新聞社 T14.06.15

「お伽 正チャヤンの冒険 七の巻」 朝日新聞社 T14.10.15

「正チャヤンの其後」 東京朝日新聞社 T15.12.25

「正ちゃんのぼうけん」 大日本雄弁会講談社 S25.01.10

「正ちゃんのぼうけん(2)」 大日本雄弁会講談社 S26.12.10¹²

(以下では上記10冊の単行本を、順に「七の巻」～「七の巻」、【其後】【戦後版①】【戦後版②】と略記する。)

表1 「正チャンのぼうけん」(日刊「アサヒグラフ」掲載)作品一覧

№	タイトル	連載期間	回数	単行本化	舞台・空間	人物・事物
1	(なし)	T12.01.25	1	巻(パレコト)	森	王、兵隊
2	(なし)	T12.01.26~T12.02.02	7	巻(けけり)	おもちゃの国	ネズミ、狼、猫
3	(なし)	T12.02.03~T12.02.13	9	巻(や23のけ)	森	ウサギ、狼、熊
4	(なし)	T12.02.14~T12.02.24	10	巻(のけ)	泰山	天女、お雛さま、飛行機
5	(なし)	T12.02.26~T12.03.06	8	巻(けや)	海辺、宮殿	天女、山賊、牛
6	ヒメユコへ	T12.03.07~T12.03.27	18	巻	ある国、城、山、川	王女、山賊、牛
7	ケムシ	T12.03.28~T12.04.05	12		町、海	ケムシ、バネ、蝶
8	ケラモノ	T12.04.06~T12.04.20	8		町、海中、貝の国	鯊骨、泣き船
9	シゴゾ	T12.04.22~T12.05.04	12		町、森	魔法使、恐竜
10	アサツカヒ	T12.05.06~T12.05.28	20		村、森、川	動物たち
11	イロイイネ	T12.05.29~T12.06.18	18		船、朝顔	女の子、少年、怪人
12	キロイカニ	T12.06.19~T12.07.13	22		海産、朝鮮	女の子、少年、怪人
13	キョウリン	T12.07.15~T12.08.09	23		海底、北の海	魚、人魚、魔物、鶴
14	ツバインダロ	T12.08.10~T12.08.17	7		富士山	老人、雷
15	ヒメユコへ	T12.08.19~T12.08.26	7		嵯峨野	馬、画家
16	アサツカヒ	T12.08.27~T12.08.31	5		森の近所	バリエーション、盲目の男

「正チャンの冒険」を論じるにあたり、上記の新聞連載作品について、初出に当たって調査を行った。このうち単行本への所収との関わりから、日刊「アサヒグラフ」『東京朝日新聞』掲載作の詳細を、表1、表2、表3に示しておいた。それぞれ掲載年月日と、作品の「舞台・空間」、および「正チャンとリス」以外に登場する「人物・事物」を調査記録した。タイトル頭の番号は、筆者がかつてに打った数字。また、のちに単行本化されたものは、「単行本化」の欄にその巻数を記した。こうした作業の過程で、いくつか変則的な事実が明らかになったので、まずその点を先に書きとめておく。

表2のなかで、作品名のあとに★印を付したものは(35話、37話、38話、39話)は、特殊な作品。読者からの投稿をもとにした織田の創作である。連載当時には読者の投稿を載せ、記者(織田)が応じる「メモ」欄が設けられていたが、この作品も同様に読者との結びつきを重視した試みと受けとれる。また、表2の23話「すゝ蟲」(T13)は、これ1点のみが小説となっており、権島勝一の絵がない。「正チャンの冒険」が存在したことになる。¹⁹小説「すゝ蟲」の最終回(T13.08.28)には休載の知らせがあつて、織田が兵役にとられたことも読者に伝えられている。

以上は初出から気がついた補足であるが、作品そのものを概観するとすれば、結論を先に書くようだが、「正チャンの冒険」は、『東京朝日新聞』紙上の作品、とりわけ大正13年、兵役に服した休載前後の作品に実りが多く、またあとでふれるが単行本にも多数収録される結果となつている。

表2 「(お伽)正チャンの冒険」(東京朝日新聞)掲載)作品一覧

№	タイトル	連載期間	回数	単行本化	舞台・空間	人物・事物
1	チンツル	T12.10.20~T12.10.31	11		朝日新聞社・金色の町	コガネビズ、地震の主
2	アサツカヒ	T12.11.03~T12.11.16	12		震災後の東京	怪鳥、武者、雷
3	ツギミツ	T12.11.17~T12.12.06	10		森の奥・海・城	森・王・大蛇
4	オホサカユキ	T12.12.09~T12.12.22	12	巻	汽車の中	足腰
5	カレタツレ	T13.01.01~T13.01.09	9	1	室内	子どもたち
6	オホサカユキ	T13.01.10~T13.01.16	6	巻	空中	ネズミたち
7	オホサカユキ	T13.01.17~T13.01.31	12	巻	空中・ネドンの国	飛行機・魔物・星
8	シシヤ	T13.02.01~T13.02.10	9	巻	山中	ミイラ・狛犬・僧
9	アサツカヒ	T13.02.13~T13.02.29	15	巻	正チャンの家・野外	魔物
10	アサツカヒ	T13.03.01~T13.03.14	12	巻	時代劇	源太・悪魔・白カラス
11	アサツカヒ	T13.03.15~T13.03.28	9	巻	山奥	小人・蝶
12	アサツカヒ	T13.03.27~T13.04.08	10	巻	劇場(明日座)	狩人の子・姫
13	正チャンとリス	T13.04.09~T13.04.23	13	巻	森の中・おもちゃの国	おもちゃの兵隊
14	オホサカユキ	T13.05.09~T13.05.18	9	巻	森の中・城	リスの母・魔女・コソドリ
15	アサツカヒ	T13.05.20~T13.06.03	13	巻	野原	女神・ラツボクサ
16	アサツカヒ	T13.06.04~T13.06.19	14	巻	宇宙空間・火星	ロケット・本星人
17	アサツカヒ	T13.06.21~T13.06.29	8	巻	夏の日	ぼろふら・ハーモニカ
18	アサツカヒ	T13.07.02~T13.07.26	22	巻	南洋・島・アフリカ	茶柱
19	アサツカヒ	T13.07.27~T13.08.06	8	巻	日本	老人・アフリカ・黒人
20	アサツカヒ	T13.08.07~T13.08.20	11	巻	森の奥	アフリカ
21	アサツカヒ	T13.08.21~T13.08.28	5	巻	武蔵野の雑木林	すず虫たち
22	アサツカヒ	T13.10.05~T13.10.10	10	巻	成文さんの家(台所)	黒猫
23	アサツカヒ	T13.10.11~T13.10.23	7	巻	森・城	悪魔・女王
24	アサツカヒ	T13.10.24~T13.11.11	8	巻	江戸	舟子
25	アサツカヒ	T13.11.12~T13.11.23	11	巻	おもしろの国	銀の兵隊
26	アサツカヒ	T13.11.24~T13.12.13	17	巻	鎮守の森	カラス・神
27	アサツカヒ	T14.01.02~T14.01.09	8	巻	新緑の城	尾上ら・魔法機
28	アサツカヒ	T14.01.10~T14.01.22	12	巻	森・湖	姫たち・魔法機
29	アサツカヒ	T14.01.23~T14.01.31	8	巻	海辺・異国の港	宝船・七福神
30	アサツカヒ	T14.02.01~T14.02.11	11	巻	海	武者・きこり
31	アサツカヒ	T14.02.12~T14.02.21	10	巻	雪の日本・森	女の子・海賊
32	アサツカヒ	T14.02.22~T14.03.10	15	巻	空・大阪・欧州	飛行機
33	アサツカヒ	T14.03.11~T14.03.25	14	巻	異国	魔王・女神
34	アサツカヒ	T14.03.26~T14.04.04	10	巻	古戦場	モッズ
35	アサツカヒ	T14.04.05~T14.04.15	16	巻	日本の寺	子ども・人さらい
36	アサツカヒ	T14.04.16~T14.05.01	12	巻	シリア	妖怪・怪獣・飛行機
37	アサツカヒ	T14.05.02~T14.05.15	14	巻	日本の五岳	こしのぼり・鶴
38	アサツカヒ	T14.05.16~T14.06.16	15	巻	海外・洋館	正チャン・女性
39	アサツカヒ	T14.06.17~T14.06.28	10	巻	野村	妖怪・奥方・姫・鹿
40	アサツカヒ	T14.06.29~T14.07.11	7	巻	村山	お伽
41	アサツカヒ	T14.07.12~T14.07.30	14	巻	汽車の中・海	汽車・姫・娘
42	アサツカヒ	T14.07.31~T14.08.11	9	巻	村	タヌキ・盗人
43	アサツカヒ	T14.08.12~T14.08.26	13	巻	千歳園シバヤ村	熊・馬・カエル・インソウ
44	アサツカヒ	T14.08.27~T14.09.17	15	巻	ペンシルバニア風の異国	白モッズ
45	アサツカヒ	T14.09.18~T14.10.01	7	巻	秋の森	王・魔術・料理人
46	アサツカヒ	T14.10.02~T14.10.13	7	巻	秋の山中	コソドリ
47	アサツカヒ	T14.10.14~T14.10.31	14	巻	田舎のホタル	ウサギ・妖怪

表3

「正チャンのその後」(『東京朝日新聞』掲載) 作品一覧

№	タイトル	連載期間	回数	単行本化	舞台・空間	人物・事物
1	第二の大騒	T15.02.12~T15.03.02	18	其後	フジの山奥・宇宙	宇宙船・黒人・太陽
2	ドッキキ	T15.03.01~T15.03.12	10	其後	森・正チャンの家	小人・蝶・ドンキキ
3	ツツシロ	T15.03.14~T15.03.24	7	其後、戦後②	家・森・城	ドンキキ・姫
4	赤いシロ	T15.03.25~T15.03.31	7	其後、戦後②	城	魔物・姫
5	青いシロ	T15.04.01~T15.04.07	7	其後、戦後②	城・川	姫・ドンキキ
6	黄いシロ	T15.04.08~T15.04.18	10	其後、戦後②	城・川	姫・ドンキキ
7	三ツシロ	T15.04.19~T15.04.20	2	其後、戦後②	城・森	姫・ドンキキ
8	ネムケザン	T15.04.21~T15.04.29	9	其後	正チャンの家・川	ドンキキ・近所の人
9	大オトコ	T15.04.30~T15.05.09	8	其後	村・山中	大男・子どもたち
10	キュービーズン	T15.05.10~T15.05.18	7	戦後①	森・おもちの家・町	キュービーズン・ドンキキ

以下では、初出と単行本化された作品、その内容と表現のスタイルに論点を絞り込んで考察を加えることにしたい。

4.567891011 洋風のフアンタジー

最初に記したように、初出作品と単行本の特色を明らかにしたいがために、作品の(フアンタジー性)〈表現のスタイル〉の側面からアプローチを試みていく。先の表1、表2、表3には手がかりとして、初出作品ごとに、「舞台・空間」「人物・事物」を抽出した点は先にもふれた。まず、ジャンルとしての特徴、フアンタジー性について検討してみよう。

「正チャンの冒険」が始まった日刊『アサヒグラフ』の初回(T12.01.25)は、山へ遊びにでかけた正チャンが、木の上でお尻を枝に挟まれ泣いているリスを発見、助けてやることから始まる(図1)。そのおれにと森の中に案内され、木の洞の入り口からフアンタジーの世界へと入り込む。

中条省平は、この出だしに注目し、「ウサギに導かれて巣穴にもぐりこむことから始まる『不思議の国のアリス』とそっくりの物語の枠組みをもっている。」¹⁴と解釈している。その後正チャンは冒険に出かけふたたび家になどどりつく。「遍歴物語／成長物語」という枠組みを用いれば、「正チャンの冒険」は遍歴的要素の濃厚な物語と判断でき、「注選型」、瀬田貞二の命名に従えば「行きて帰りに物語」¹⁵の基本的な物語構造をもっている。

これまでの「正チャンの冒険」に対する一般的な評価も、そうしたフアンタジー性に注目してきた。表1、表2、表3の「舞台・空間」の項を一覧すればわかるように、たしかに「正チャンの冒険」は、世界をまたにかけての活躍が目立つ。素材面



図1 「正チャンの冒険」(1) 正チャン(白) おもち(黒) 森の中を歩いている。おもちが「ここへ入って」といって、木の洞の入り口を指す。

図2 「正チャンの冒険」(2) 正チャン(白) おもち(黒) 木の洞の入り口から入ると、不思議な世界が広がる。

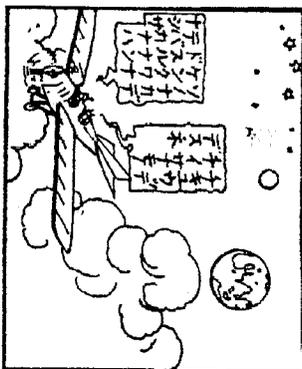


図3 「正チャンの冒険」(3) 正チャン(白) おもち(黒) 不思議な世界で、おもちが「ここへ入って」といって、木の洞の入り口を指す。

図4 「正チャンの冒険」(4) 正チャン(白) おもち(黒) 不思議な世界で、おもちが「ここへ入って」といって、木の洞の入り口を指す。

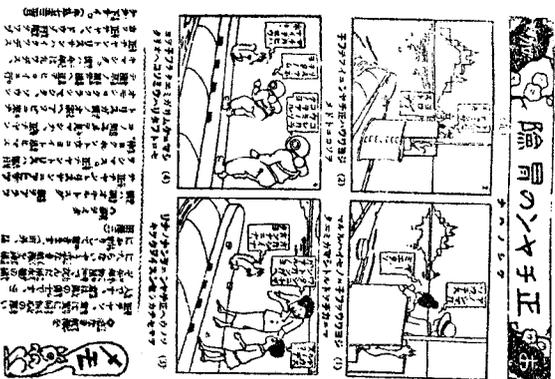


図3

「正チャンの冒険」10話 『東京朝日新聞』T13.02.22、9回

も例外ではない。「人物・事物」の欄からもわかるように、登場する人物や怪物も、日本の武者をはじめ、魔神、恐竜、悪魔、馬人、女神、七福神、妖精、小人、オモチャなど、子どもが好む素材が多い。「中世の騎士物語やギリシア神話、仏教的俗言やアラビアンナイト、イソップ寓話や諸国伝説、およそ古今東西の説話類の和洋折衷的な吹き寄せによる奇抜なリスの存在も、そうした雰囲気結びあっていたと言えるだろう。「正チャンの冒険」は、いわば古今東西の物語におけるフアンタスティックな素材を、漫画というメディアに接ぎ木した作品ということになるだろうか。

上記と異なったことを言うようだが、実は「正チャンの冒険」という作品には、また別の世界観も存在している。これは初出に探りを入れないと見えてこない。フアンタジー性が濃厚であるものの、その一方で科学的な装い、SF的素材が随所に見られるのだ。

まず関連するものとして、現代文明を象徴する機械が多数描かれている点に注意したい。たとえば『東京朝日新聞』掲載作《表2》では、汽車が4話、46話に、飛行機が7話、30話、36話、40話に、潜水艦が10話に、飛行船（ロケット）が17話に登場。ともに正チャンとリスが乗って旅する設定となっている。大正期の半ば以降は、科学教育の振興が謳われ科学読み物とともに乗り物絵本も多数出版された時代で、¹⁷「正チャンの冒険」もそうした時代の機運を反映して、多数の乗り物が登場したものと理解できる。

以上の初出作品のうち、戦前の8冊の単行本に収録されたのは、汽車を描いた4話「オホサカユキ」、飛行機の登場する「ホウライサン」《図2》と40話「モリノタカイ」の3点のみ。潜水艦に乗り女ばかりの島にめぐりあうという10話「ケンノハナ」《図3》や、木星からやって来た宇宙人とともに火星まで探検の旅にでかける17話「アタラシイセカイ」などは、単行本に収録されてはいない。

とりわけ最後の17話「アタラシイセカイ」《図4》は、奇抜な発想に立つSFの注目で無視することができない。火星と間違えて地球に降りたった木星人たちが、正チャンとリスをつれて本来の目的地である火星に旅するという科学もので、後半、火星が争いのないユートピア社会である点が強調されている。「正チャンの冒険」には、こうしたユートピアがいくつかの作品に描かれており、織田の社会観人間観が子ども漫画ながらも表明されていて興味がつきない。

こちらの方はあまり知られていない漫画だが、「ロンキナトウサン」(麻生豊 T12.11)が載った『報知新聞』には、のち大正14年2月11日より「タロウノタビ」なる子ども漫画の連載が始まっている。作者名は、「ノムラコトウツクル オオタガコウエガク」(野村胡堂、太田雅光のこと)。「タロウノタビ」はまったくのSF漫画で、月世界旅行が主たるテーマ。科学博士の夢のなかに助けを求める女神が登場、博士はラジウム発動機をもとにロケットを発明し月世界へと旅立つが、すでに月では文明が築かれていて…とストーリーは展開していく。興味深いのは、描写力は劣りはするものの、絵柄が「正チャンの冒険」に似ている点だ。「正チャンの冒険」におけるSF的

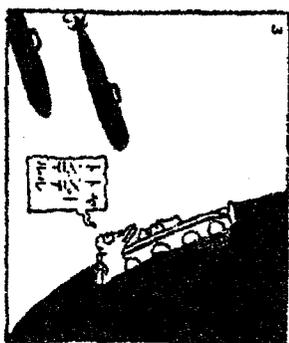


図4 セウカセナラシイセカイ(お伽) 正チャンの冒険17話『東京朝日新聞』

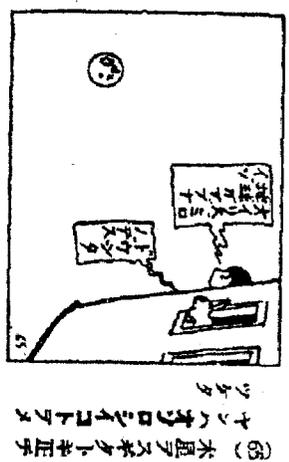


図5 「第二の太陽」〔お伽) 正チャンのその後1話〕 『東京朝日新聞』T15.03.01、17回、1コマめ

発想の17話「アタラシイセカイ」は大正13年5月の掲載だから、絵柄が類似していることも含めてこの「タロウノタビ」なるSF漫画が、「正チャンの冒険」に刺激されたのではないかという可能性を否定できない。

筆者は一度、新聞連載の子ども漫画の歴史をまとめたことがあるが、¹⁸「タロウノタビ」も含めて、こうした埋もれた作品への評価、影響関係等には、今後の詳細な研究が待たれる。

〔お伽) 正チャンの冒険〕が大正14年の10月に終了し、その後しばらくして再開された新聞での新連載「正チャンのその後」(T15.02、《表3》)にも、SF志向は受け継がれていく。このシリーズは2話から8話は「其後」に、10話が戦後の単行本『戦後版②』にというふううに、ほとんどが当時の単行本に収録された。しかし、1話「第二の太陽」(T15.02)と9話「大オトコ」(T15.04)の2編だけは未収録のままにほっておかれることになった。

未収録作のうち、1話の「第二の太陽」《図5》もきわめてSF性のある作品となっており、記憶にとどめる必要がある。正チャンは、宇宙船に乗って太陽系の端の冥王星からさらに遠い宇宙へとやってくる、そこで第二の太陽を作る現場に出くわすという設定の物語であったが、先の「アタラシイセカイ」と同様、単行本に収録されることはなかった。今日から見てもSF性が豊かで、もし当時の単行本に組み入れられていたら、きっと話題になったにちがいない。のちにはSF漫画のルーツとして再評価が行われたことだろう。

織田はなぜ単行本に組み入れなかったのだろうか。その理由はとりもなおさず、

「正チャソンの冒険」という物語が、異世界フアンタジーであることを、読者に強くアピールしたからではなかったろうか。そこに織田の「正チャソンの冒険」における物語観を読み取ることができる。

6. 7891011 フアンタジー空間としての「森」

織田は、SF的素材よりもフアンタジーの演出に力を注いだ。そのフアンタジー性はいまままでみてきたように、日本から始まってアラビア、西洋、モンゴルなど、遠い異国をも舞台にしていたが、その一方で、別の空間にも開かれていた点は見逃すことができる。もうひとつのフアンタジーの空間は、この物語の空想の基点ともなっていた点で重要な意味をもつ。「森」という空間がそれである。

「アサヒグラフ」連載の第1回 (T12.01.25) は、その点で象徴的な出だしとなっている(図1)。山のなかへ遊びにでかけた正チャソンは森でリスを助け、そのおれにと、木の洞の入り口からフアンタジーの世界へと入り込んでいく。表1、2、3を再度みていただくといよい。森や山中は、「正チャソンの冒険」におけるフアンタジー空間への直接的な入り口、あるいは森そのものが迷宮としての空間構造をもっているのだ。

表2でこの点を確認しておこう。3話「フジキノミズ」をはじめ、6話、12話、14話、15話、22話、23話、25話、28話、30話、33話、51話、52話など、森を舞台にした作品は多数にのぼる。野原のできごとを描いた16話「ユメ(カゲエ)」、38話などの作品、田舎の村に素材をとった44話「ツキノカゲ」47話、48話、49話、53話なども加えると、かなりの作品が野外や村、とりわけ森を不思議の舞台にしていることがわかるだろう。

「森」や「山」は古来、神の住処であると同時に死後の世界に通じる場所であり、また現実には恐ろしい動物や盗賊の住む「人外境」としてイメージされてきた¹⁹。正チャソトリスはそうした森のなかに迷い込み、眩惑のはてに別世界の住人たちと出会う。こうした異世界が、権島勝一の「リブリズムに徹底した画風」(鈴木文史朗)²⁰により、切実感を与えられていたことは言うまでもない。

「森」は、「正チャソンの冒険」という漫画に神秘と畏怖のイメージを付与していた。その点は戦後の単行本『戦後版②』(S26)で、より鮮明化していくのだが、この点はある節で詳しくふれることにしたい。

では、いったいなぜ「森」なのか。憶測の域を出ないが、作者である織田信恒の留学時代の思い出が反映されているのかもしれない。織田はニューヨークの河畔で下宿していたとき、公園で多数のリスと遊んだという²¹。こうした海外でリスと遊ん

だ公園での記憶が、洋風フアンタジーの空間を、森へと終始結びつけていたのではないかと考えられるのだ。たとえば日本の森が舞台にとられている場合があったとしてもである。

以上のように、「正チャソンの冒険」という物語には、不可思議な空間としての「森」の存在がまず先にあり、その森を通路として異世界が存在するという空間構造をもっていた。意外なことに、一見都会的なセンスに満ちたフアンタジーと見なされる「正チャソンの冒険」にあって、「森」は欠くことのできない空想の場であったのだ。

7. 891011 過渡的な表現のスタイル

次には、漫画としての表現のスタイルに目をむけてみたい。こちらには案を担当した織田信恒ではなく、おそらく絵を担当した権島勝一の意識が反映されているものと思われる。

「正チャソンの冒険」が連載された大正末期から昭和の初期、いまだコマ漫画は、きちんとしたコマ配列が決定されていなかった。大正末期には、現在のような右から左へ、上から下へというコマの読み取り順がまだ未確定だった。

具体的には次のようだ。

まず、連載当初の「アサヒグラフ」紙上(図1)では、縦四コマの配列。右から左へと読み進めるスタイルが維持される。説明文はコマの下に置かれている。続く『東京朝日新聞』紙上では、縦に四コマを配列しその右に説明文を添える四コマ形式のもとに、この漫画は始まっている(図6)。ところが、第2話「アタラシイミヤコ」の3回め(T12.11.06)から形式は変化しだす。縦四コマであったものを、田の字の形にコマを組み直し、右上→左上→右下→左下の順に読ませるようになっていく。説明文はすべてコマの下に置かれることに(図3)。

この田の字形式のコマ構成はほぼ1年ほど継続。しかし、第32話(T14.01)から元の縦四コマの形式に戻るものの、セリフの文字を横書きにし、またコマ外の説明文をコマの左に付けるよう変更が加えられる。縦に四コマを配列するこの形式は以降ずっと続いていくことになるが、複雑なことに、第36話(T14.02)からは説明文をコマの右に戻している。セリフの横書きは、そのままずっと継続。さらには、「正チャソンのその後」に至ると連載の初回(1922)のスタイルに戻ってしまう。なんとめちゃやこしい(図7)にモテル化して示す)。

いま、表現の要素に分解して記せば、『アサヒグラフ』および『朝日新聞』連載時の作品において、次のような変化が見られる。

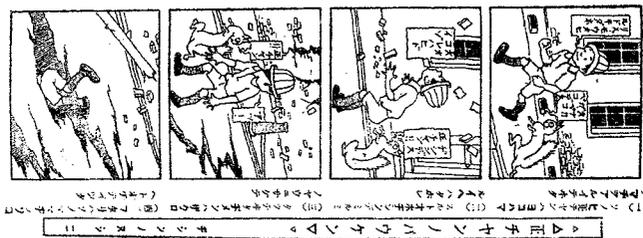
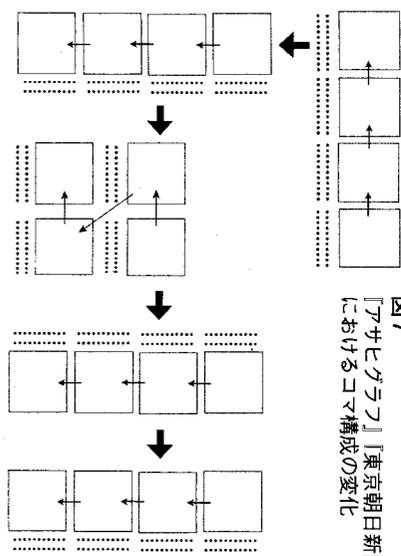


図7 『アサヘグラフ』「東京朝日新聞」におけるコマ構成の変化



〈コマの配列〉 = 横に四コマ→縦に四コマ→田の字形式→縦に四コマ
 〈説明文の位置〉 = コマの下→右→下→左→右
 〈セリフの言葉〉 = 縦書き→横書き→縦書き

このような推移は、いまだ物語性のある漫画の形式が模索状態であったことを、私たちに教える。とりわけ「正チャヤンの冒険」はセリフを用いながらコマ外の説明文も併用していた過渡的な作品だったので、なおいつそうこうした混乱が生じたものと思われる。その試行錯誤のあとと見なせるのだ。

図6 「チンソナス」〔(お伽)正チャヤンの冒険1話〕「東京朝日新聞」T12.10.21、2回
 ちなみに、「アタラシイミヤコ」の3回め (T12.11.06) で田の字に改めたのは、同時期大正12年10月25日より連載開始されたマクマナスの「親爺教育」の影響とみられる。正チャヤンの冒険」が朝刊、「親爺教育」の影射とみられる。正チャヤンの冒険」の方は「正チャヤンの冒険」とは異なり、初回から田の字の四コマ配列で掲載されていた。こうした海外の漫画のコマ構成が、「正チャヤンの冒険」にも影響を及ぼし、表現のスタイルを変化させたと考えられるのである。

村余曲折を経てから「正チャヤンの冒険」は、最終的に新聞連載の初期の形におおしく。ということは、海外の漫画の影響を受けながら、本来の日本語表記の縦書きの習慣が、ずっとこのマンガのコマ構成を呪縛していたことになるだろう。

ただここで注意しなければならないのは、吹き出しを用いながらもコマの外に語り言葉を添える形式が、当時のもっとも先鋭的な表現ではなかったという事実だ。「正チャヤンの冒険」が連載された日刊『アサヘグラフ』には、おそらく織田と樺島のコラボであるう桃太郎のシリーズ (T12.01.28より、毎回6コマ、無題、無記名) が時おり掲載されている。こちらは吹き出しのみを用いた今日のマンガ形式となっている。よりモダンなのである。つまり、二人は欧米のマンガをヒントにしながらいろいろと工夫を凝らしていた、そのひとつが「正チャヤンの冒険」だったというわけなのだ。「正チャヤンの冒険」は、日本と欧米の漫画の伝統のなかで揺れ動いた。それは、漫画家としての経験がなかった樺島の (あるいは織田の) 試行錯誤の跡と受けとれるが、一方で欧米の影響を受けつつ独自のスタイルを模索した、大正末期の日本の漫画状況の一断面をも指し示しているのである。

8. 単行本化にみる変容のあと

最後にこれまで述べてきたことと関わりさせて、単行本化にまつわる問題をとりあげたい。「正チャヤンの冒険」は、『アサヘグラフ』『東京朝日新聞』紙上を通じて、多数の正チャヤンの物語が創りだされた。そうした作品から単行本に何を採り何を落としか、またどういった描き変えが行われたのかを追うことにより、作者たちの創作意識を再確認することができるはずだ。単行本化の作業は作者にとって、より悟性的に作品を顧みる機会にはかならないのだから。

まず戦前の8冊の単行本にふれ、そのうち戦後版についておぼろげにしようと思う。

最初に戦前の単行本について。大正13年7月から大正15年12月まで出された単行本 (『巻の巻』～『七の巻』『其後』)、計8冊のカラー一本は、ストーリー展開については、ほぼ新聞初出と変わりがない。初出時に多めに書きこまれていた言葉を削る、残忍な言葉づかいを直すなど、多少の変化は見うけられるもの (その点はあとで詳述)、大幅な描き変えのあとを見いだすことができない。

絵の方には多少の変化が見られ、とりわけ『荳の巻』収録作5編はすべて、『アサヘグラフ』紙上の作品を描き変えている。初期は絵柄が不安定で、物語展開も稚拙であったためだろう。また、『参の巻』所収『蓬萊山』は、初出「ホウライサン」(T13.01) をもとにした新稿となっているのだが (図8)、初出原稿が紛失したための処置なのかどうか、その理由ははっきりしない。²²

ところで戦前の8冊の単行本のうち、「正チャヤンの冒険」のもっとも空想豊かな部

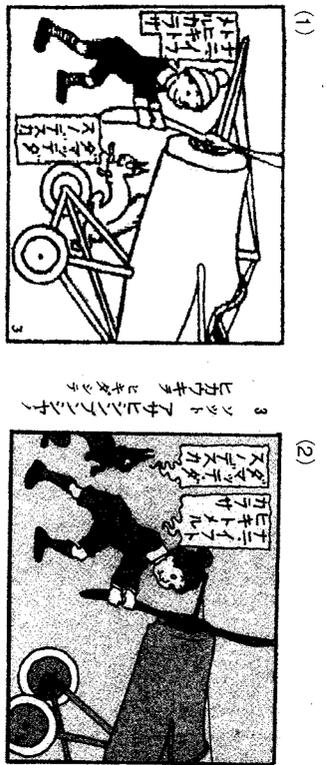


図8 カビヤシヤンとヒヤツトツツ (3)
ネツガキヒツキウ

初出から単行本への変化

- (1)「ホウライヤン」(「お伽 正チヤンの冒険」7話)「東京朝日新聞」T13.01.10、1回、3コマめ
(2)「蓬萊山」(「お伽 正チヤンの冒険 参の巻」朝日新聞社 T13.10 p.4

表4 戦後版単行本への収録作品一覧

単行本	収録作品	コマ数	再録単行本	初出時タイトル	初出連載期間
戦後版①	リス	14	香の巻	(なし)	T12.01.25
(S25.01.10)	キューピー	18	キューピーヤン	キューピーヤン	T15.05.10~T15.05.18
	たからぶね	30	タカラブネ	タカラブネ	T14.01.02~T14.01.09
	まぼろしの人かげ	52	チヨウゼン	チヨウゼン	T13.11.25~T13.12.13
	ゆめの花ぞの	36	ユメ(カゲエ)	ユメ(カゲエ)	T13.05.09~T13.05.18
戦後版②	森のかね	25	四の巻	ハリノクダ	T13.03.15~T13.03.26
(S26.12.10)	あめやさん	21	五の巻	アメヤサン	T14.04.05~T14.04.15
	森の秋	36	モリノフキ	モリノフキ	T13.10.11~T13.10.23
	三つのしろ	58	其後	三ツノシロ(他5編)	T15.03.14~T15.04.20

分を収録しているのは、「五の巻」(T14.03刊)と「六の巻」(T14.06刊)の2冊である。SF的発想に立つ作品が除外された点は残念と言うほかないが、「シロイカラス」「ユメ(カゲエ)」「モリノフキ」「タカラブネ」「シラスヒ」などのフアンタジー系の初出作品が、カラーで美しくよみがえって印象ぶかい単行本となりえている。

次に戦後に出された単行本『戦後版①』『戦後版②』の方をみておく。こちらはカラーではなく本文はモノクロの印刷だが、すべて描き改められており、よりリアルで洗練された絵柄となっている点に注意をひく。もしカラー版であったらとこれも惜しまれる。

戦後版に収録された作品を一覧したのが、表4である。大正から昭和初期に出された8冊の単行本との対応関係もわかるように示しておいた。表4から以下のようなことがわかる。

8冊のカラー版単行本から戦後の2冊の単行本へ、そのあいだに重複して収録さ

れた作品にいま注目してみた。戦後版の2冊はあわせて9作品から成り立つが、このうち戦前の8冊の単行本と重なるのは7作品。戦後の単行本出版にあたっては、おそらく新聞連載の初出作品に遡って取捨選択したのではなく、主に計8冊にわたる戦前のカラー単行本から採用されたものと思われる。多くが当時の単行本と重複しているのだ。

ちなみに初めて戦後版の単行本に収められたのは、2作品のみ。「キューピー」(初出時「キューピーヤン」T15.05)は「正チヤンのその後」の最後の作品で、シリーズとしても締めくくりとなる記念の意味あいから収録したものと考えられる。もう1作「あめやさん」(初出時「アメヤサン」T14.04)は読者の投稿を元に成り立った作品。成立時の特殊な事情を考慮したのかもしれないし、子どもの誘拐という素材が戦後すぐの社会にひびきあうと判断しての収録なのかもしれない。

以上が単行本の概要である。

9.1011 『戦後版①』と『戦後版②』の作品構成

戦後の単行本『戦後版①』『戦後版②』は、大正末から昭和初期にかけて刊行された計8冊のカラー版所載の作品を元に、描き変えが行われた。いま、描き変えられた作品に焦点を絞って戦後の単行本の傾向を考えてみる。戦後版にそうした漫画が再録されたのはなぜか、その理由に注目してみたい。どうしてその点に注目するのかと言えば、戦後版の特質が発見できるし、ひいてはもともとの「正チヤンの冒険」という物語の特徴が、逆照射されて浮かびあがる可能性があるからだ。

結論から言うと、『戦後版①』(S25)は「遠い異国」が舞台にされている点に際立つ。収録作全5作のうち、海外の港を訪ねる「たからぶね」、朝鮮の古都が舞台の「まぼろしの人かげ」、女神のいる花園の出来事「ゆめの花ぞの」の3作はその典型だろう。対して『戦後版②』(S26)では、「森」が直接のテーマとなっている。収録作全4作のうち、「春のかね」「森の秋」「三つのしろ」の3作品が森を背景とした物語となっている。つまり、戦後の2冊の単行本には、大正期に新聞連載の「正チヤンの冒険」があわせもっていたフアンタジーの空間＝「遠い異国」と「森」が、そのまま2冊に分けて受け継がれていることになるのだ。

実際にどうか見ておこう。『戦後版①』(S25)では「ゆめの花ぞの」が、いま述べた特徴の典型を示している。紙数の関係から絵を示すこととどめるが、ヨーロッパの神話の女神を描くところなど、いかにも洋風の雰囲気を感じ立つ。シルエットをやめ、克明に正チヤンや花々の描写を行っているのは、樺島の後年の評師を考慮し、リア

(1)



スリムゲテラツテラツサヤ (3)
カツビドトラカコソガ

図9 初出から単行本への描き変え
(1)「ユメ(カクエ)」(『お伽 正チャヤンの冒険』16話)『東京朝日新聞』T13.05.18、9回、3コマめ
(2)「ユメ」『お伽 正チャヤンの冒険 六の巻』朝日新聞社 T14.06 p.38
(3)「ゆめの花その」『正チャヤンのぼうけん』大日本雄弁会講談社 S25.01 p.75

(2)



36
キヤンソラ
リカコソラ
トコソラ
トコソラ



34
しんね そをあげると
つぼくの おもてから リカが
ひたした

リズムを強調したためだろう(図9)。

一方『戦後版②』(S26)では、作品「森の秋」がその特質をよく示している(図10(3))。「正チャヤンの冒険」もうひとつの重要なフアンタジー空間＝「森」の神秘性を前面に打ち出しているのだ。初出は『東京朝日新聞』掲載の「モリノアキ」(T13.10)だが、単行本「五の巻」(T14.03)に収められ、のち「森の秋」と改題されたもの。森のなかで馬人と女たちとの戦いが迫力ある画面に描かれている。

刊行の順序から判断すると、「正チャヤンの冒険」の異国フアンタジーとしての性格を示す『戦後版①』がまず出され、その後、より基本的な舞台である森をテーマに『戦後版②』がまとめられたものと思われる。

IO.11 残酷描写の減少

ここで視点を少し変えてみる。この「森の秋」の描き変えの跡に目を凝らすと、「正チャヤンの冒険」のまた別の側面が浮かびあがってくる。初出から単行本化において、森の神秘的要素は共通して維持されるのだが、内容の点ではある部分が大きな変化を見せているのだ。その点を補足しておきたい。残酷な描写の減少である。

(1)



28
モリノアキ
カキカキ
カキカキ



34
モリノアキ
カキカキ
カキカキ

図10 初出から単行本化への描き変え

(1)「モリノアキ」(『お伽 正チャヤンの冒険』25話)『東京朝日新聞』T13.10.23、10回、2・4コマめ
(2)「モリノアキ」『お伽 正チャヤンの冒険 五の巻』朝日新聞社 T14.03 p.47、38・40コマめ
(3)「森の秋」『正チャヤンのぼうけん』(2)大日本雄弁会講談社 S26.12 p.44

まず、初出から『五の巻』の本に収録するとき、残酷な描写が影をひそめている。

ラスト近くのシーン3種を図10に掲げた。正チャヤンが馬人に矢を射り、剣で切り倒した後のコマ。(1)と(2)の前半分のコマを比べると、初出と『五の巻』に共通してそのまま引き継がれていることがわかるが、『戦後版②』では省かれてしまっている。死骸の山を築くのではなく、馬人が次々と城から逃げ出すという展開に変更されているのだ。

(3)には、『戦後版②』におけるラストのコマを引いておいた。初出(1)の説明文は、「タダモリガチシホノイロニソメラレテアキフカキヲカタツテキタ」(ただ森が血潮の色に染められて秋深きを語っていた)であったが、『五の巻』(2)では「モリガアツカニソメラレテアキフカキヲカタツテキタ」(森が真っ赤に染められて秋深きを語っていた)へ変更。さらに『戦後版②』(3)では、「やがて、さむい風がふきやむと野も山も、にしきをかざる、赤いもみじに、てりかがやいた。」に変えられている。

初出にある「チシオニソメラレテ」という言葉は、床に広がる馬人の血潮をイメージさせる。それが『五の巻』『戦後版②』と時代を経るにしたがい、残酷なイメージ

が薄められていくのだ。戦後版は出版統制への配慮も関わっているだろうが、通して来た場合に、織田自身の漫画観・教育観が変化していったと解釈した方が妥当ではなからうか。

ちなみに「正チャヤンの冒険」が載った『東京朝日新聞』には、満州事変以降、注目すべき漫画がいくつも掲載された。たとえば相馬御風作・明石精一画「日出チャヤントギン公」(S07.02.01～S07.04.06)は、超能力を手に入れた少年日出チャヤンが、満州で死体になった馬賊を食物に作り変えて食べてしまうという出だしをもっていたし、初山滋の漫画「ペコポンポン」(S09.06.09～S09.08.30)は、絶え間ない空腹のほかに、自らのお腹を銃に撃ち抜いてもらおうとする内容だった。²³

新聞連載の子どもの漫画では、もともと漫画家ではない作家や挿絵画家たちが手をそめ、ユーマア主体であった漫画というジャンルに、残酷性や悲劇性をもちこんでいた。戦前の漫画出版は、メディアアごとに新聞連載、雑誌連載、単行本の三つに大別できるが、新聞連載はジャンルとしていまだ未成熟な部分を他のメディア以上に残しており、「正チャヤンの冒険」に示された残忍な描写は、そうした出自によるものという解釈が成り立つ。

——以上、初出から単行本への変化を縦軸に、またフアンタジー性とスタイルのあり方を横軸に、「正チャヤンの冒険」という漫画を検討した。作者の創作意識を明らかにし、漫画史での位置づけを行った。

「正チャヤンの冒険」は、一般的に受け取られているように、異国フアンタジーの要素だけではなく、SF的発想も一方にあわせもっていたし、その背後には神祕の空間としての「森」が強く意識されていた。初出作品を見ることによって、そうした点が明らかになった。また、単行本化においてSF作品は捨て去られ、「異国」と「森」が「正チャヤンの冒険」を彩る世界観として、より強調されていく過程も明確化した。一方、表現のスタイルにおいては、連載時にきわめて頻繁に変化を示し、海外と日本の漫画とがせめぎ合った時代相を象徴していた。さらには、残忍な描写に示されているように、漫画の専門家でない描き手が手かけた新聞漫画は、これまでも漫画とは異なった色彩を帯びる、そうした経緯も浮き彫りにしえた。

これまで「正チャヤンの冒険」は都会的センスに満ちたフアンタジーと理解されがちだったが、実際には以上のような内実をもつ作品だったし、また表現のスタイルにおいても想像以上に試行錯誤が繰り返された漫画だったのである。

12.3.4.6 78910 II. キャラクターを用いた類似本

以上の点をふまえた上で、最後に正チャヤンという少年のキャラクター設定について、若干補足して締めくくりたい。

正チャヤンは、読者の共感を強く得たキャラクターだった。拙書『子どもマンガの巨人たち』²⁴では、子どもたちの投票全665点を分析し、読者が正チャヤンとリスをまるで生きている存在であるかのように気づかひ、共感する姿を立体化した。まるで実在の人物のように、漫画の主人公を応援し親愛の情をよせていたのである。

大正期の童画やアールヌーボーの影響を受けた「正チャヤンの冒険」は、洋服姿正チャヤン帽といういでたちからして、大正モダンイズムの象徴的存在だったが、子どもたちが共感をよせた理由のひとつに、「正チャヤン」という平易な名づけが関わっていたであろうことは容易に想像できる。すぐ近くにいた子どもをイメージさせたわけだが、と同時に「正チャヤン」は、正一でも正太郎でも正三でもなく、そのいずれにも当てはまるという匿名性を、あわせ持っていたという点を見逃してはならない。いわば正チャヤンという名は、「匿名性をもつ固有名詞」と言えようか。それが、読者に等身大のキャラクターと印象づける理由のひとつとなっていたのである。

正チャヤンは智恵と勇気をもつ。ただし、つねにヒーロー性を發揮していたわけではなく、事件を傍観する消極的な描写の展開もあり、また悪人や怪物にピストルをぶっぱなしたり剣を突き刺したり、行動面における残忍さも一方に見いだせる。その勸善懲惡に徹した内容は、「正チャヤン」という名が、大正の「正」であるとともに、「正義」や「正直」などの略称をも兼ねていたのではとの連想もわく。

こうした正チャヤンとお供のリスというキャラクターは、その他の出版社によって刊行が続けられることになった。ただし異なった作者によって。たとえば「正チャヤン文庫」として榎本書店から「題名の判っているだけで八十冊」(大江正彦)²⁵ あったというし、金井信生堂からも、「正チャヤントトウサン」等の絵本が刊行されたという。²⁶ それだけ正チャヤンというキャラクターが、子どもたちの心に定着していたことの証しであるわけだが、それは正チャヤン帽に洋服という外見上の魅力に起因するだけではない。キャラクターというものは物語の時空をつねに背負う。これまで見たように、新聞連載と単行本を通じて、正チャヤンというキャラクターがいまきとして実在感を獲得していたからこそ、作者や掲載の場を変えても正チャヤンは正チャヤンでありつづけたのである。

なお、本研究は、平成16年度同志社大学「学術奨励研究費」の援助を受けたものである。

(平成18年10月30日記)

註

- 1 たとえば、作田啓一他「マンガの主人公」至誠堂 S40、尾崎秀樹他「子どもの本の百年史」明治図書 S48、瀬田貞二「十二人の絵本作家たち」すばる書房 S51、など。
- 2 竹内オサム「愛容するマンガたち」①～④、『ピラソジ』13号 (H16)～16号 (H17) 連載。編集部「収録作品一覧と作者略歴」「複製 絵本絵ばなし集解説」ほるぷ出版 S53 p.210
- 3 織田信恒「『正ちゃん』は生きてゐる」『アサヒグラフ』S13.10.19 p.44
- 4 織田信恒注4と同じ p.44～45
- 5 織田信恒注4と同じ p.45
- 6 椎島勝一「心の流浪」『児童文学への招待』所収 南北社 S40、鈴木文史朗「その頃の思い出」『アサヒグラフ』S13.10.19、鈴木文史朗「漫画は世界の言葉」『文藝春秋』S25.5、などの回想がある。
- 7
- 8 竹内オサム「小星作・東風人画―『正ちゃんの冒険』・異国アテンタジとその読者」『子どもマンガの巨人たち』所収三一書房 H7
- 9 鈴木文史朗「漫画は世界の言葉」『文藝春秋』S25.5 p.63。おそらく手本にした漫画とは、1919 (大正8) 年よりイギリスの新聞『Daily Mirror』で始まった、A.B.Payne による『P.P.SQUEAK AND WILFRED』のことだと思われる。
- 10 新聞連載時の1話「チンノスジ」では「正ちゃんノバウケン」のタイトル。2話「アタラシイミヤコ」から「正ちゃんの冒険」に変更され、「お伽」の文字も枠外に添えられた。作者名は最初、日刊「アサヒグラフ」連載時と同様に記載がない。11話「シロイカラス」から「小星作 東風人画」と明記された。
- 11 「ネスミの日記」で正ちゃんが登場する5話のうち、ふたりが中心となって活躍するのは、「正ちゃん」[京ニンギョウ] 2話のみである。また、作者名「小星作・シヨタロ画」のシヨタロが「本田庄太郎」であることが、最終回に記されている。なお、あとの注13に示すように、「正ちゃんトリス」なる本が刊行されたらしいが、筆者未見。
- 12 大正期に出された単行本「巻の巻」から「七の巻」までの発行所は朝日新聞社、印刷は大阪の同社が担当している。「正ちゃんの其後」になって発行所も印刷所も東京に移った。また、戦後出された単行本の作者名は、戦後版の2冊とも「文・織田信恒、絵・椎島勝一」である。
- 13 「正ちゃんの冒険」の小説については、入江正彦が、織田の創作話集「正ちゃんトリス」(大正15年 金尾文淵堂) の存在にふれている(入江正彦「路地裏にいた正ちゃん」『近代庶民生活誌』18 三一書房 H10 p.569)。また入江は、同単行本所収の小説「鉄の小箱」に言及しているが、新聞連載にも「テツノハコ」(50話) なる漫画がある。関連性については不明。
- 14 中条省平「現代マンガと正ちゃん」『正ちゃんの冒険』解説 小学館 H15 p.135
- 15 瀬田貞二「お伽の文学」中央公論社 S55 p.6～7
- 16 瀬田貞二「十二人の絵本作家たち」すばる書房 S51 p.220
- 17 滝川光治「明治末期から大正期の乗物絵本」『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅰ』ミネルヴァ書房

- H13 p.235～236
- 18 竹内オサム「新聞連載の子どもの漫画」『子どもマンガの巨人たち』所収三一書房 H7
- 19 北村昌美「森林と日本人」小学館 H7 p.95～96
- 20 鈴木文史朗「その頃の思い出」『アサヒグラフ』S13.10.19 p.44
- 21 織田信恒注4と同じ p.45
- 22 「巻の巻」は初出を描き改めたものだが、p.31～33のみ「アサヒグラフ」初出の絵をそのまま用いている。また「六の巻」収録「テラセン」のp.27は、単行本で初めて追加されたもの。新聞連載時16回と17回とに、2日続けて同じ絵を掲載した編集部のミスによる。単行本化に際して追加訂正がなされた。
- 23 注18と同じ p.218～219
- 24 竹内オサム注8と同じ
- 25 入江正彦「路地裏にいた正ちゃん」『近代庶民生活誌』18 三一書房 H10 p.569
- 26 大橋真由美「金井信生堂絵本目録(2)」『国際児童文学館紀要』14号 H11 による

お知らせ

● 第7回大会の開催について

と き **2007年6月16日(土) 17日(日)**
と ころ **京都国際マンガミュージアム**
研究発表およびマンガ作品の募集要項など、詳細に関しては追ってお知らせします。

● 部会設立募集のお知らせ

以下の要件に基づき、部会設立を募集します。部会活動には援助額として、年間一律5万円が支給されます。申請期間は2007年2月1日～4月30日です。ぜひ会員同士の研究や情報の交流にお役立てください。

日本マンガ学会 部会設立要件

- ・学会員の5名以上の同意署名を必要とする。
- ・規程用紙に下記の事項を記入し、事務局に提出する。
- 1) 部会名 2) 設立趣旨 3) 責任者名 4) 実施内容・計画 5) 同意者署名一覧
- ・要望書が提出された直後の理事会にて決議を行い、出版物およびホームページ上で会員に報告する。

● 学会ホームページとニューズレターに掲載する情報の募集をします。

募集する情報は学会の主旨に合致することを条件とし、以下のものです。

イベント、研究会等の情報と報告・研究書、研究雑誌等の出版情報

送っていただいた情報は、以下の所に掲載します。

○ホームページ掲載

イベント情報・研究会等の情報・研究書、研究雑誌等の出版情報

○ニューズレター掲載

イベント情報および報告・研究会等の情報および報告・研究書、研究雑誌等の出版情報

イベント、研究会等の情報は、ニューズレター各号の発行以降に開催のもので、各号の締切までに事務局に届いたものについてはニューズレターに掲載します。

次号のニューズレターは2007年5月末発行予定
締切：2007年4月2日(月)必着 学会事務局宛

- ・事務局で学会の主旨に合致することを確認された情報を掲載します。
- ・情報は電子メール (manbun@kyoto-seika.ac.jp) にて受け付けます。またワープロで作成された原稿は、テキストファイルに変換して送信してください。
- ・図版は使用できません。
- ・掲載にあたって必要最小限のレアウト変更、タイトル挿入などを除いて、原則として送っていただいた原稿そのままを掲載いたします。したがって、送信される情報に誤りがないことを十分確認してください。

- ・情報提供者の氏名、連絡先および各情報に関する問い合わせ先は必ず明記してください。
- ・掲載された情報に関する問い合わせやトラブル等は、提供者側で責任を持って対応してください。

本会へのご意見・ご質問、ご投稿をお待ちしています！

マンガ研究 Vol. 11

Manga Studies Vol. 11

2007年3月31日発行

編集・発行 日本マンガ学会

日本マンガ学会事務局
〒606-0000
京都市左京区比叡山一本杉
京都精華大学表現研究機構 マンガ文化研究所 内
TEL (075)702-3330 FAX (075)702-3388
E-mail manbun@kyoto-seika.ac.jp
HP <http://www.kyoto-seika.ac.jp/hyogen/manga-gakkai.html>

発売 株式会社 ゆまに書房

〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6
TEL (03)5296-0491 (営業) FAX (03)5296-0493
E-mail eigyou@yumani.co.jp
HP <http://www.yumani.co.jp>

制作 株式会社 桜風舎

印刷 株式会社 スイッチ・テイク

ISBN978-4-8433-2352-6 C3379 定価：本体1,800円＋税